



奇跡は物と精 神の間にある



はじめに

私は十代の頃、何も大切なものがこの世にありませんでした。しかし、漠然と、心が物よりも大切であることがわかっていました。そして、私は物をおろそかに扱っていました。しかしそんなある時、この世界の物質を大切に扱うと、この世を突き抜けた尊い場所にあると考えられる、美しい概念を感じることができるとに気がついたのです。哲学者のイマニュエル・カントはこの世界の事物は「現象」というものであり、物の本当の姿はこの世を突き抜けた「物自体」という世界にあると、彼の著書である「純粋理性批判」で書いています。どうしてこの世界の物に対応すると、この世界を突き抜けた彼岸の世界を感じるのかを、カントが純粋理性批判で説明していると私は思うのです。そこで純粋理性批判について、私の言葉で書いてみたいと思い、この文章を書きました。

コペルニクスの転回

カントが純粋理性批判で書こうとした最大の謎は、「ア・プリオリな総合判断はどうして可能か」という問いです。「ア・プリオリ」とは、「経験に先立った」という意味であり、「総合判断」とは、「述語に含まれない概念を主語が持つ」という意味ですが、この謎の答えとしてカントはとても革新的な考え方をしているのです。「主観が対象を構成する」というのです。それをカントは「コペルニクスの転回」と言っています。普通は物（対象）を見て主観が構成されと考えるかもしれませんが。ですから「対象が主観を構成する」と考えるはずです。しかし、カントはこれをひっくり返して、自ら、天ではなくて地がまわっているという地動説を唱えたコペルニクスになぞらえて、「コペルニクスの転回」と言っているのです。

苦しみ

なぜカントは従来の考え方をひっくり返したのでしょうか。ア・プリオリな総合判断とは、大まかに言えば、物理学や数学で、経験したことのない事象を数式で表せることです。これを、人の主観の中に神につながる光があらかじめ経験に先立って入っているからだと考えてみます。経験する前から、人は神の摂理を知っているからそれを数式で表せるのです。それがなぜ可能なのかをカントはコペルニクスの転回で解いているのですが、これを解く時に「苦しみ」というものについて考えることを軸にしてみました。私は純粋理性批判に「苦しみ」というイメージを持っています。しかしその苦しみは決して「絶望」というイメージではありません。私達を押し上げてくれる原動力というイメージです。例えば、苦しいことがあって、この空虚な物質界になど何も大切なものなどないとやけになっている時、私達の「主観」は苦しみに支配されています。しかしその時必ず、私達はこの世界の中の物と真剣に対峙するエネルギーが湧いているのです。苦しみが原動力になっているのです。そんな時、私達は、「主観から対象に向かって」働きかけているのです。

私達は、苦しい時、この世界を空虚なものと考えがちです。そんな時、私達の心・・・「主観」も、虚ろなものとなっているのかもしれませんが。しかし、だからこそ、もがくように、この世界を正しく見て、光をさがそうとする力が働き、私達は真っ直ぐ「対象」に向かうのです。それがコペルニクスの転回を生み出すと思えるのです。例えば、何か苦しいことがあり、この世界には何も信じられるものなどないと、自暴自棄になっている時、いつもはおろそかに扱っていたものが、逆になぜかくっきりと際立って輝いて見えることがあると思うのです。例えば、昔、苦しかった時代に大切な拠り所にしていたけれど、そのあと忘れ去って部屋の片隅に放置していたお守り・・・ふとそれが目に入って、「ああ、あの時も頑張っていたな。今も頑張れる。」と思ったり。 どうしてコペルニクスの転回はア・プリオリな総合判断を解く鍵なのでしょう。ア・プリオリな総合判断と言う、「主観の中の光」は、この世界をつきぬけた大切なものの存在に気が付き、心が美しいものだとなる時、私達が「主観から対象に向かって」いるということを言っているのだと思います。主観・・・心がキラキラしているものだと思う時というものは、まず、心が空虚で空っぽである苦しみにもがき、この世の事物に向かって宝探しをしないと訪れないのです。

原点にかえる

コペルニクスの転回によって、この世界の物に向かう時、その物の中に何かキラッと光るものを感じたら、不思議なことに、私達は自分の心という原点にかえっています。「どうして心が苦しかったのか」という原因に戻るのです。そして、「ああ、この光に出会うために苦しかったのか」と悟るのです。苦しみはまず、心を暗いところへ引きずり込もうとします。心はそれに抗って、この世界の物（対象）に向かいます。そして、対象の中に光るものを見つけます。これが、神からのメッセージ（啓示）と言えます。その時、心は救われ、苦しみの意味が初めてわかるのです。このメッセージを対象の中から探るために苦しみに引っ張られていたのだと。私のイメージでは、人の心の中に、神に通じる光源があるのです。それは心の美しさと言えます。人は神に、永遠に生きることに耐えうるだけの美を持つように要請されているのだと思われます。その美に気がつくためには、苦しみがどうしても必要なのです。痛みを知らない人は、この美を磨かれないのです。ア・プリオリな総合判断と言う、原点の中の光は、苦しみに抗って主観から対象に向かって光を探す「コペルニクスの転回」を人生の中で繰り返して、より強く確かな奇跡の力に近づいていくのです。

神の啓示

もし、つらいことがあって、もがいて何か大切なものをつかんだなら、そのつかんだものが、神の啓示と言えるのです。カントの言う、ア・プリオリな総合判断は、とても解くのが難しい謎ですが、神はあえて、大切なア・プリオリの光を、苦しみの棘の中に隠してこの世界のどこかに隠してしまったのです。それを探す方法が、この世に生まれることと、主観から対象へ向かう「コペルニクス的転回」だと思うのです。もし、苦しみの意味に本当に気がついたなら、それが人を成長させ、強くし、高い精神の世界に飛翔させる力を生むのです。その力を求めていくのは、哲学に限らないはずです。音楽やスポーツやあらゆる分野に言えることでしょう。

この世界は、物の世界であり、精神は見ることはできません。だから、目に見えるものへの執着が起きます。私はずっと、この世界の執着から逃れるのは仏教や厳しい道徳しかないのではないかと思っていました。カントはこの世界を超越するために、厳しい道徳を、実践理性批判と言う純粋理性批判の次の批判書で書いていますが、しかし、私にとっては、仏教も、実践理性批判も、そのように生きることが難しい雲の上の心を説いたものに思えたのです。だから私は純粋理性批判の中の、この世界を葛藤して生きるというイメージを心の軸にし続けました。それは、私の言い方をすれば、マイナスの中に人生の軸を埋め込んで、もがくというやり方でした。しかし私は、マイナスの意味を純粋理性批判からつかんでからは、カントも純粋理性批判が軸であったから、高尚な道徳を実践理性批判で書けたのではないかと思ったのです。自我と執着は、完全に否定せずに、物質界からエネルギーを取り出して飛翔するジャンプ台にしてはどうでしょうか。お釈迦様も、執着の苦しみと戦ったから、いつしかそれをぬけられたのかもしれませんが。私は、ア・プリオリな総合判断の光を、この世界の物質への対峙によって理解できるとわかったので、これから哲学をしていく上で、この世界の物を大切にしていこうと思います。ア・プリオリな総合判断は私にとってのジャンプ台なのかもしれません。

哲学にかかわらず、どの分野も、自分とどれだけ向き合ったかに大成するかどうかがかかっています。その中で自分の小ささや、醜さに改めて気がつくものです。そんな中で、自分の癖や傾向、個性をつかんでいるかどうか成功のカギです。全てはマイナスからのスタートだと私は思っています。マイナスの沼からもがいて始まってこそ最も強い柱が立てられるのだと私は思います。主観とは、少し突っ込んで言えば、自我であり、執着を生み出すものです。カントはその中から、光を発見したのです。それが、ア・プリオリな総合判断と言う言葉に表されているのです。カントにとっては、主観は決して受動的に物を認識するものではなく、苦しみというマイナスを解いて光を発掘するための大切な素材なのです。自我と向き合ってマイナスの沼から柱を立てるという、あらゆる分野に共通する作業は、光の源泉を掘りおこすことなのです。この謎を、純粹理性批判を軸に解いていきたくて、私はこの文章を書きはじめました。カントが、主観が対象を構成すると言った意味は、この、物質界で私たちが神から要請されていることをカントが言いかえているのです。すなわち、主観に始まり、事物という対象に向かって、この世界でどう向き合ったかに、人として何かを大成して光を作り出せるかが、かかっているのです。どうしてア・プリオリな総合判断が可能か・・・これは言いかえると、「どうして人は経験していないことを数学や物理学で解けるのか」ということですが、これは、言い換えれば「どうして主観の中に神の摂理があらかじめ入っているのか」と言うことです。その答えとして、カントは、主観の中に、対象を突き抜けるカギが存在するということを純粹理性批判で書いているのです。哲学と向き合った私にも、それはマイナスから立てた柱が、光源を持ち、天に向かって伸びていくイメージとしてとらえられました。

この世界は執着の沼でできたカオスです。生きることが全く苦しくない人はいないでしょう。真理の光は「物」でできた檻の中に隠されています。その檻の中から巧妙に鍵を見つけて抜け出る方法があります。それは皮肉なことに、苦しみや悲しみなどのマイナスの感情を味方につけることなのです。何か悩みがあった時、それを抜け出して解決する最も有効な方法は、苦しみと友達になり、「まあいいや、大丈夫」と明るく考えることです。その時、不思議と悩みは解決されています。私達は、最初から鍵を持っているのです。物の檻の中の鍵は、カントの哲学を借りて言えば、ア・プリオリな総合判断なのかもしれません。批判哲学と言う、理性を批判するマイナスからのスタートは、苦しみというマイナスの中からでありながらも、最初から私達の心の中に光源があると、とにかく信じることから始まっているのです。

苦しみのイメージでとらえる時空

カントは、純粋理性批判を出版したのち、世の中の無理解に苦しめられました。その無理解のもととなった一つが、時空を「直観形式」と言う、主観的条件としていることです。私は、これもまた私の主観的な解釈なのですが、時空と言う、この世界の物の存在を可能にする器のようなイメージのものが、この「物の檻」と先ほど表現したものではないかと考えてみました。すると、カントがそれを主観的なものと考えた意味がつかめるような気がしたのです。なぜならこの「檻」を解き放つためには、私達の側（主観）に引き込んで、苦しみのマイナスエネルギーを使う必要があるからです。この「檻」について説明する前に、私の二つの体験を話させて下さい。

私は、ひとつの指輪を手にはめて、それに念を入れ続けていたことがあります。その時、私は自分が入れた念がいつか救いの力となることを信じました。私はその指輪を、現実が苦しくてむなしくてたまらない時に買いました。その指輪は苦しみの象徴でもあったのです。その指輪が私を苦しみから救ってくれたかという、決してそんなことはありませんでした。しかし、ある変化がおきました。この世が苦しいのはあまり変わらないのですが、むなしいわけではなくなったのです。私はその指輪をはめる前、大切なのは物ではなく心だと思っていました。精神の世界を重視する観念哲学であるカントの哲学も知っていました。確かに精神は最も大切なのです。それなのにどうしてひとつの指輪を大切にすることが私の中に変化をもたらしたのでしょうか。私は指輪という「物」を大切にすることで逆に死後の世界、精神の世界の存在を強く感じられるようになったのです。カントは純粋理性批判で「ア・プリオリな総合判断はどうして可能か」という問いをくりかえし解こうとしています。その答えのひとつに、「主観が対象を構成する」という、カントが「コペルニクスの転回」と呼ぶ考え方があります。私の体験に照らし合わせると、私は、指輪という、「対象」を見つけました。しかしもちろん私の主観が指輪をつくることはできません。カントはこの世の事物よりももっと先を見ているのです。人の精神は、主観に始まり、この世の事物へ向かい、その事物をつきぬけた神の摂理の世界に向かう・・・その時に経験（対象）が持つ神の啓示を読みとる（先立って認識する）。そのためにはこの世の事物に対応しないといけない。私は指輪を大切にすることでその先にある神の摂理の世界を感じていたに違いないのです。しかし、やはり指輪は物体であり、物の檻の中のものです。私は指輪に、念を入れ続けました。しかしその念が私を苦しめていくことになりました。私の経験全てを吸収していくかのように感じるその指輪を重く感じ、私はそれを家に放置して、ほかにきれいな小物をあつめるようになりました。私は「主観が対象を構成する」と言うカントの言葉による「主観」に含まれる苦しみの重さからのがれようとしてしました。そしてひたすら対象の先にある美しい、神に近い世界にあこがれました。しかしある時、ア・プリオリな総合判断の持つもっと深い意味に気がついたので。心の中にある光源こそ最も神に近いということに・・・。

「お守り」

それはお寺に行った時のことです。私はお寺で金色のお守りを買い、その光に何かを感じたのです。私はその帰り、友人と厄年のことを話し、自分の30代のことをふりかえってみました。30代には厄年が二回あるそうです。私の30代は、実りあるものといえたかもしれませんが、それが本当に無駄がなく正しい方法だったわけではないような気がするのです。私は現実を苦しいと思うたびに、哲学を勉強しながら図を書いてきました。その図は確かに自分が上昇するために書いていたものでした。しかし、上昇しようともがいていたやりかたそのものが、逆に私をひきずりおろす力を生んでいたような気がするのです。「ア・プリオリな総合判断」。私はこの言葉を考えてみました。苦しいことからのがれようとしすぎると、逆におぼれてしまうときがあります。ア・プリオリな総合判断は、「経験に先立つ認識が、主語の概念に含まれない新しい述語の概念をひっぱりだすことが可能か」という意味であり、私には、「原点（経験に先立つ認識）にかえり、苦しみ（原点）の中から光を導き出さない」という意味に思えたのです。私はこの言葉に思いをいたしてから、とても大切なことに気がつきました。それは、自分の苦しかったことを、自分を責めてのがれるための痛みのくぎとして感じるのではなく、自分をある程度ねぎらい、その中にある大切な教訓をとりだす光の材料として考えることでした。それまでの私は、苦しいことがあるたびに、自分を否定し、痛めつけて上昇しようとしていました。それは、針でつつかれて逃げるように苦しいことでした。しかし、カントの言葉で、真の上昇は、苦しかった自分を責めず、その苦しさを原点として次に進むための光にすることだとわかったのです。私はその日お寺でお参りしてお守りを買ったことに大きな意味があるような気がしました。この大切な日が、今までの痛い針を封印してくれるような気がしたのです。

私がお寺で買ったお守りと、ずっと持ち続けた指輪がヒントになり、時空が直観形式である謎が解けたのです。私が指輪に対して持っていたマイナスエネルギーが、時空についてのカントの考え方で切り開かれた感じをつかみました。話を戻しますと、私は次第に、指輪にマイナスのエネルギーを感じるようになっていました。ずっと持ち続けたせいかなと思っていましたが、そうではないようです。私は指輪を物体だと思いすぎて、執着のかたまりにしてしまったのです。正に「物の檻」です。私は純粋理性批判を読み返して、カントの、時空についての考え方が、この檻を解き放つ鍵だと気づいたのです。マイナスのエネルギーが、「苦しみ」「執着」として、檻をとりまいています。これは、真理の光を隠すためです。私は時空について「物の檻」という表現をしました。この檻（時空）は、苦しみや執着でがんじがらめになっていますが、主観の側に引き込まれた時、碎けてしまうのです。指輪の持つ、執着の苦しみから逃れようとした私は、不思議な引力で、原点の苦しみにかえりました。その時、私はお守りを手にしていました。時空が主観の側にあるのは、物質界の不思議な力を引き出す引力を作るためかもしれません。その時、物の中の観念の力と私達の主観が呼応して苦しみが解け、ア・プリオリな総合判断の光が・・・真理の光がそこにあるのです。それこそが奇跡の力というものではないでしょうか。心からこの世界の物に向かうことで、観念（精神）が輝くのです。私は、指輪が苦しみを連れてくると思い、何度か捨てようとしてしました。しかし、捨てるにはしのびませんでした。そんな時、金色に光るお守りを見て、物はその奥底に観念を持っていると気づいたのです。その観念とは、心の原点の中の光です。その観念が、私達の主観に訴えて何かを呼び覚ます時、奇跡が起きるのだと思います。それがア・プリオリな総合判断です。カントはア・プリオリな総合判断という光を発掘しました。この光が神の存在すると思われる、「物自体」と言う彼岸の世界から、神が物質界にこめたものであると気づくことが「奇跡」の発掘ならば、私はその力を確かに感じたのです。指輪が持っている苦しみの針を切り開く鍵が、時空の中にありました。時空は直観形式という主観的条件となることで、時空の中にあるこの世界の物質の本当の力を引き出すのではないのでしょうか。カントの、コペルニクス的転回と言う、主観から対象へのアプローチと、時空を主観的条件として、物の中の観念が私達の主観に訴えてくるような考え方（これは私の勝手な解釈かもしれませんが）は、「ア・プリオリな総合判断」の謎の答えです。カントは「ア・プリオリな総合判断」の中に、本当の奇跡が存在することを心のどこかで知っていたように私は思うのです。物と精神が入り組んで、その間に奇跡が存在することに、大きな力をもらって、私は生きています。